「社会で子育てを支えるしが　県民フォーラム」　講演要旨

滋賀県発の子育て支援策が日本を変える
－ネットワークを活かした子育て三方よし－

講師：渥美由喜（(株）富士通総研経済研究所主任研究員）

皆様こんにちは。渥美と申します。私は子育て支援の研究をしており、自称「足で稼ぐ研究者」です。滋賀県をはじめ色々な地域をまわり、その取り組みから多くを学ばせていただいています。最近は特に、滋賀県の取り組みに着目しています。と申しますのは、今後の次世代育成支援のキーワードは「ネットワーク」だと考えており、滋賀県は先進的な取組みを進めているからです。こちらの図をご覧ください。子どもが真ん中にいて、家庭の中に親がいて、地域には企業もあり子育て支援のＮＰＯもあります。どちらかというと、これまでの少子化対策は、各主体の取組みがばらばらで、うまく連携できていませんでした。私は、行政には「信用・情報・人材」という三つの強みがあると思っています。行政は、そういう強みを活かして、各主体を結びつけていく必要があり、そのカンフル剤の一つとして今回の「子育て三方よし基金」は非常に有効な施策だと思っています。

「子は鎹（かすがい）」と言われます。しかし、私は親だけじゃなくて、地縁・血縁いろんなネットワークを連携させる強烈な力を子どもは持っていると考えます。今後、子どもを中心にして地域がまとまっていく、活性化していくことが期待されます。滋賀県が先進的な自治体だと申し上げましたが、それはいろんな主体でネットワークをつくることが、すでに始まっているからです。

昨年の 11 月には、行政・企業・ＮＰＯなどいろんな人たちが「仕事と生活の調和の実現に向けた共同アピール」を宣言しています。滋賀県はもともと環境先進県としても有名な自治体ですけれども、私は環境と子育ては非常によく似ていて、中長期的な視点がないとなかなか取り組みが出来ないと考えております。子育て支援は取り組んですぐに子育て環境にめざましい変化が起きるということはありませんが、中長期的に見ると確実に地域全体が良くなっていきます。そういう点で環境と子育ては共通しています。

自然環境に関して、私がとても好きな言葉があります。ネイティブアメリカンのことわざですけれども、「地球は未来の大人である子どもからの借り物である。」という言葉です。だから、子孫のことを考えたら、環境は大切にしなければいけません。おそらく今回の「子育て三方よし基金」にも通底する考え方だと思います。地域社会の環境や企業の職場環境は、未来の市民である子ども、未来の労働者である子どもからの借り物、だから、みんなで一緒に子育てを支えていこうという考え方があるように思います。

以下、「子育て三方よし基金」についてどんなことが期待できるかについて、事例を交えてご紹介します。

まず、夫婦間ネットワーク。最近、カップルカウンセリングという取組みが注目されています。日本は親子という縦の関係は強い一方で、夫婦という横の関係はこれまで弱いという特徴がありました。そこで、神奈川県が「パパ・ママ応援セミナー」というのを始めています。ほぼ全カップルで共通するのは、夫は妻にイヤイヤ連れられてくるという点です。私は女性講師と一緒にファシリテーター役を務めています。午前中は夫グループ、妻グループに分かれて、フリートークするとすごく面白いです。

妻は「家で何もやってくれない」、夫は「いくらやっても、妻は評価してくれない」と

いう感じで別々にすると盛り上がります。午後はそういうことを踏まえて「こういう意見が出されました」と言うと、どのカップルも「どの夫婦も同じようなことが言われてるんだなぁ」とまず笑いが起きて、それから個別に夫婦と向き合うと、スムーズに進むことが多いです。夫婦で向き合って、「今後は、もっとこういうふうに役割を変えてみよう」といったことを話したりします。

この事業のお手伝いしていて強く感じることは、女性の方は「職業人としてのネットワーク」を強める余地があるということです。全国だとJ-WINという管理職女性ネットワークというのが出来ていて、その地域版も出てきたりしています。職場にはなかなか同じ境遇の人がいない女性たちが、職場以外のところでネットワークをつくっていくというのは面白いと思います。

逆に男性は「ライフ」、特に「地域人としてのネットワーク」が弱いですね。先ほど申し上げたカップルカウンセリングでも痛感することは、妻たちはすごく仲よくなります。一方、夫たちは様子伺いで、まず最初に妻たちが仲良くなってから、そのおまけみたいな形で仲良くなっていきます。男性は名刺交換から入ります。女性は名刺などなくても、波長が合えばすぐにフランクにしゃべれるのに、男性は「この人は何者だろう」と構えてしまう。男性はシャイだなと思って見ています。

男性の地域人としてのネットワークづくりという意味で面白い取り組みだと思っているのは、埼玉県でＮＰＯが開催している「焼きいも大会」です。生協さんから焼きいもをもらってきて、それをグループに配布する役割をＮＰＯが果たしているのですが、それ以外は何にもしません。教えたり余計なことはしません。焼きいもを送ることをきっかけにして、地域で男性たちが、どうすればおいしい焼きいもを作れるかみたいなことを話し合い、企画する中で仲良くなっていく。また、「落ち葉のプール」。これは落ち葉を集めて、子どもと一緒にお父さんが遊ぼうという催しで、子どもそっちのけでお父さんがすごく楽しんでいます。さらに、ダンボールの家を作ったりもしています。

次に、世代間ネットワークも今、注目されていますが、滋賀県の大津市では「老いも若きも」というすばらしい取り組みがなされています。子どもから高齢者まで、いろんな世代の人たちが集まるという活動です。人生の総決算の時期にみんなでお年寄りの生活を彩り、これまで培ってこられた知恵を次の世代に伝える場としても、きわめて意義深い実践ではないかと思います。

こういう取り組みは滋賀県以外にもあります。例えば、三重県にある医療介護施設では、１階部分に学童保育所をつくって、２階以上にお年寄りが居住しています。擬似家族としていろんな取り組みをやっています。元気な子どもたちの姿を見てお年寄りが刺激を受け、ケア効果があったり、お年寄りが伝統的な遊びを子どもたちに伝えていく場になっています。子どもたちも喜んでベーゴマなどで遊んでいますし、大勢のお子さんを育ててきたおばあちゃん、おじいちゃんが、やんちゃな子どもを見事にしつけたりしています。

面白かったのは、子どもたちが「あのおじいちゃんたちすごいんだよ。すごいマジックするんだよ」って言うんです。何かと思ったら、「あのおじいちゃん、口から歯を自由に取り出せるんだよ。」と言ってました。施設長は、「当センターは、『シルバーサービスセンター』と書いてありますが、『シルバーサーカス』の方がいいかもしれません。」と話していました。

次に、企業とのネットワーク。今回の「子育て三方よし基金」もそうですけれども、これは非常に重要なキーワードです。三重県の例ですが、「みえ次世代育成応援ネットワーク」という情報交換の場を県のホームページ上に作っていて、そこに参加している企業や団体が、「こんなことで手を組みたい」と書き込むと、「これだったらうちが手伝

える」ということを別の団体が書き込む。例えば、企業がＮＰＯに子育て支援の講師の依頼をする場合、「男性従業員に『子育て支援のセミナー』をやりたいんだけど、どこかのＮＰＯ手伝ってくれませんか」ということを書き込むと、やってやろうというＮＰＯが手を挙げて手伝うという仕組みとなっております。

そんな中で、従業員 10 人足らずのガラス屋さんですけれども、ガラス屋ならではの業務特性を活かして地域貢献できないかと、社長さん自らが「出前授業」をやっておられます。「こういうガラスの近くにいると、地震の時に破片が飛び散って危ない、こういうガラスだったら大丈夫」、「射滅効果で環境にやさしいガラスがあるんだよ」ということを保育園、学童保育所、小学校などいろんなところで教える事業をされていて、とても好評だと聞いています。

また、静岡県には、会社をあげて障害を持っているお子さんたちの外出のサポートをしている企業もあります。千葉県には、会社の中で子どもを育てることを 20 数年取り組んでいる企業があります。ゴミを拾うとか、40 種類くらいのボランティアのサークルを作って、色々な地域貢献をなさっています。その一つとして地域に開放した学童保育所を社内でやっておられて、夏休みや冬休みには従業員の子どもの倍くらい地域の子どもたちがいます。夏休みに子どもたちは、「会社って、とても不思議です。部長さんみたいに偉い人が一番暇そうです。」といったことを作文に書く、社長はそれを部長会議で読み上げるそうです。

中小企業が若い人の獲得に頭を悩ませている時代ですが、地域に貢献するいい会社だということで、学童保育所の卒業生が 2 人就職してくれたそうです。こういうふうに、地域貢献や子育て貢献が従業員の確保につながった例もあります。

私は今回の「子育て三方よし基金」は本当にすばらしいと思っています。企業が次世代育成、少子化対策、子育て支援に関わる意義は 3 つあって、まず 1 つは従業員の子育て支援。これは最近よく言われるようになってきています。これは、内向きの子育て支援だとすれば、今回の「子育て三方よし基金」は外向けの支援、つまり社会貢献としての子育て支援という非常に重要な視点があると思います。

各家庭や周りの親族など、子どもをかわいがっていている人たちに消費パワーがあることを「子育て三方よし基金」によって体感できるのではないと思います。例えば、地域の子育て支援活動に参加している企業やＮＰＯでワークショップを開いたり、先ほどご紹介したような埼玉県のような取り組みをすると、子どもの周辺にこんなに消費パワーがあるんだということを実感できるはずです。

今月、関西にも「キッザニア」がオープンしたと聞きましたが、「キッザニア」は非常に人気があります。私もボランティアで子ども会をやっていて、そこに来ている子どもたちから「キッザニア」へ行ったという話を耳にします。ファーストフードがあって、「モスバーガー」はレタスのシャキシャキ感を出すために氷にくぐらせるというのをやるそうですが、そういうことを体験した小学校低学年の子どもたちが、「すごくおいしい。あんなふうに氷にくぐらせるのは、やっぱりモスだよな。」と言っています。「あれ食べちゃうとナントカは食えないよな。」なんてことを言うわけです。幼い時にファンになると、その後ずっとファンになるので、消費者の青田刈りという意味もあります。

滋賀県でも「淡海子育て応援団」というすばらしい取り組みがあって、たくさんの企業が協力されています。今後、その協力企業が子どもたちの職場見学とか、子ども向けプログラムなどをすれば、地域の消費者としての子どもたちが、将来ずっとファンでいてくれるんじゃないかなと思います。

子どもをめぐっては、企業やＮＰＯの方々がすでに活動なさっています。ただ、私は一番重要なのは個人ではないかと思っています。私は「市民の三面性＝家庭人、職業人、

地域人」という言葉を非常に大切に思っています。女性は結構バランスが取れている人が多いと思いますが、男性は職業人がメインで、家庭人や地域人としての要素が弱いように思います。「ワーク・ライフ・バランス」は女性が職場で活躍するために必要ですが、それ以上に男性が地域社会で役割を担っていくために重要じゃないかと思っています。

私は、これまで 15 年間、ボランティアで子ども会をやってきました。平日の仕事以上に大切なライフワークだと考えています。今、3 歳の男の子から中学生まで来ています。最近、私の 2 歳の息子も連れて行くようになり、子どもたちが私の息子もかわいがってくれています。子どもたちの中でもまれて泣いたりもしていますが、とてもいい場だと思います。

子ども会のボランティアをやっていて痛感することがあります。私が 1 昨年に育児休業を取りました。その際に、赤ん坊を連れて地域社会をウロウロしていましたが、こういう人は「珍獣」のような存在です。私は、公園デビューに見事に失敗しました。「この人は失業者かしら」、「この人は奥さんに逃げられたかわいそうな人かしら」みたいな哀れみの眼で見られました。また、独身時代にも週末に子どもを集めて遊んでいましたが、そんな男性は珍獣以上に、「疑わしい存在」です。一度パトカーを呼ばれたこともあります。

紙芝居をしたり、おやつ食べたり、遊んだりと、たわいないことしかしてないのですが、オープンな場所でやっていると、いろんな子どもが来てくれます。今、来てくれている子どもの中には、家で虐待にあって、施設に入っている子どもたちが 6 人ぐらいいます。その他に、学校に行っていない子どももいます。そういう子どもたちと今まで 1500 人くらい出会ってきましたが、最近は、幼かった子たちが高校生とか大学生とか社会人になって、スタッフとして一緒に活動をしてくれていることです。自分たちがかつて遊んでもらったのと同じように子どもたちと遊んでいるのを見て、本当に誇らしく思っています。

子どもを見ていると、子どもが今の日本社会のいろんなゆがみの影響を顕著に受けているのを感じます。一方で、日本の将来を担っていくこの子たちに無限の可能性を感じています。今回の「子育て三方よし基金」は、滋賀県の将来をどのように創っていくのかという意味で、重要な役割を持っていると思います。

私は「三方よし」という言葉がとても好きで、滋賀県でしゃべる時だけではなくて、いろんなところで使わせていただいいます。企業では「経営よし、従業員よし、顧客よし」、家庭では「家計よし、夫婦よし、親子よし」、学校では「先生よし、友達よし、学びよし」だと思っています。「子育て三方よし基金」は職場や地域全体に「お互いさま、思いやり」を広げていくカンフル剤だと思っています。こういう取り組みが滋賀県発で全国に広がっていくと、日本全体がもっと暮らしやすい地域になっていくと思っています。

以上、ご静聴ありがとうございました。